

## 武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

## 誕処如何

## ——ルカ伝第2章1～35節——

1971年12月26日

小池辰雄

大ドラマ 本ものの現象 全人 女性即男性 献げと担い 平安運動 御霊の実力 藁の器  
無才 両極性 人間は本来、無 正気の沙汰 終末的現在 言い逆らいの徴

## 【ルカ2:1～35】

1その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令カイザル・アウグストより出づ。  
2この戸籍登録は、クレネオ、シリヤの総督たりし時に行われし初めのものなり。  
3さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。4ヨセフもダビデの家系また血統なれば、5既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという所に到りぬ。  
6此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥せたり。旅舎におる所なかりし故なり。

8この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、9主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。10御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、11今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。12なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』  
13忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』  
15御使等さりて天に往きしとき、牧者たがい語に『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』  
16乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。  
17既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、18聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。  
19而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。  
20牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。

21八日みちて幼児に割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。

22モーセの律法に定めたる潔の日満ちたれば、彼ら幼児を携えて、エルサ



レムに上る。<sup>23</sup>これは主の律法に『すべての初子ういでに生まるる男子は主につける聖なる者と称えらるべし』と録されたる如く、幼児わがなを主に献げ、<sup>24</sup>また主の律法に『山鳩やまばと一対あるいは家鳩いえばとの雛ひな二羽』と云いたるに遵したがいて、犠牲いけにえを供えん為なり。<sup>25</sup>視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔けいけんにしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在います。<sup>26</sup>また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、<sup>27</sup>此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親ふたおやその子イエスを携え、この子のために律法の慣例ならわしに遵したがいて行わんとて来りたれば、<sup>28</sup>シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、<sup>29</sup>『主よ、今こそ御言ごことばに循したがいて僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。<sup>30</sup>わが目は、はや主の救すくいを見たり。<sup>31</sup>是もろもろの民の備え給いし者、<sup>32</sup>異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』<sup>33</sup>かく幼児に就きて語るとを、其の父母あやしみ居たれば、<sup>34</sup>シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。<sup>35</sup>——剣つるぎなんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念おもいの顕れん為なり』

## ●大ドラマ

司会のお話にもあったように、非常に今、世の中は狂っております。とにかく、あの爆発事件といい、いろいろな人間の憎しみの表れの現象がこここに爆発しているわけです。こういう狂った世の中、そういう時に我々はこの降誕節を迎えるんですが、ただ端的に喜ぶわけにいかない。いよいよ、キリストの使徒たち、彼らの生きざまに私たちは沿って、この20世紀のあと30年ですが、突っ走らなければならないということをしみじみ思うわけです。そういう意味において、今日はまた大事な降誕節と思います。

降誕節の聖書の話は、私はもう話し尽くしてしまって、内容的には繰り返しになるわけです。しかし、「2+2=4」という、数学はそれだけの話ですけれども、福音の世界は、内容がいくら同じであっても、毎回新たなということです。ルカ伝2章に基づいて行きたいと思えます。特に8節あたりから、

8この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ひつじかひありしが、9主の使その傍らひに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚いたく懼おそる。

私は、このキリストの降誕のところで、非常にこの箇所が何ともいえず好きです。というのは、イスラエルの民はもともと遊牧の民である。イスラエルの歴史は、アブラハムからずっと、牧羊ということがその生活のキーノート（基調）をなしている。信仰生活そのものも、いわゆる生活も、全くそこが一つである。これは詩篇23篇がそのことを一番よく語っているわけです。



世界の歴史も、我々の生涯も、要するに詩篇23篇をもって歌われているところの事態であるということ。それで私は「幕屋」というようなことを言いだしたわけですが。この歴史も旅であり、人生も旅である。

「大波小波越え往きて目指すはかなた岸高き国」

と、私はそういう海の旅に例えて言ったようなこともありましたが、神さまは目的地に向かって、目的の国に向かって前進しておられる。

「今日も明日も次の日も我は父と共に進み往くなり」

と。キリストはそのようにして、前に向かって進んでおられる。

宗教には、悟りの宗教と、それから、追求の宗教とありますが、このキリストは求めてやまず追求してやまずという性格を持っています。仏教の方は悟りの世界ですから、歴史というものがどうしてもぼけてしまう。神の實在する世界はこの歴史的世界です。歴史であると同時に、また非常なドラマである。

日常生活そのものもいかにドラマであるか。いわゆる芝居以上のドラマであるということ。私はこの頃つくづく思う。芝居の役者ではなくて、我々自身が本当の意味の、作られざるどころの人生の俳優で、一人びとりが演劇をしているわけです。舞台のはまねごとですが、我々のは本ものです。そういう意味において、この大ドラマの一端を承って進んで行くわけです。

### ●本ものの現象

羊飼いたちが、忽然として光にでつくわした。この光は、そこらの光とは、太陽の光とも違う。これは全く靈光です。そういう靈光に照らされた。しかも、御使の声が来て、

10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜  
おしずれ よろこび  
の音信を我なんじらに告ぐ、

大福音、大歡喜の音信です。世の中には、いろいろな喜びがありますが、今日現れるところのこの喜び以上のものはない。また、この喜びを消すものはないという、その大歡喜の音信。それを汝らに告げると言う。

次元の違ったものが現れると、みなこれを懼れる。幽霊が現れても、我々は恐がるわけです。恐がるということは要するに、不信ということ。懼れと疑い。とやかくと考える。そういうのがこの現代人です。懼れ、疑い、考え、思案する。

キリストの生き方を、イエスの生き方をいつも見てください。いつもイエスに立ち帰るんです。イエスは、

「我思うゆえに我あり」

なんて、そんなことはおつしやらない。デカルトあたりが出てくると、もうそれが非常にえらいように思うけれども。シュバイツァーが、



「デカルトがあんなことを言っているのは本当に困った話だ」

と言っています。近代病の元を作ったのはデカルトだ、「我思うゆえに我あり」なんてね。もしイエスがおっしゃるなら、イエスは、

「我愛するゆえに我あり」

とおっしゃったかもしれない。

大歡喜の音信という。喜びは、花を見ると何となくうれしくなる。花を見るということから生ずるところの感情が、うれしき、喜びということになる。喜びというのは、そこから溢れてくるところの現象なんです。

溢れてくる現象を、その喜びを、求めてはいけない。喜びを求めることは、これは本当の正しいことではない。求めるものは、

「本もの」

です。本ものを求めて、本ものにぶつかる、喜びというものがそこから発してくる。もし、喜びを求めるなら、それはいわゆる幸福主義ということになる。いわゆる御利益宗教になる。我々の、福音というのは、御利益宗教ではない。これは本ものの宗教です。本ものを求めて、本ものにぶつかる。要するに、イエスという「本もの」が現れたというわけだ。この本ものは天界に隠れていました。天界に隠れていた者が降誕した。降り生まれる。降誕することによって、そこに本ものが現象した。本ものの現象が、この降誕ということです。喜びなんていうことを一番先に言うものだから、ただ、

「クリスマスはうれしい、うれしい」

でね、中身がなくなっちゃった。そして、この世的なものに切り替わっちゃった。我々は、ただおもしろおかしいということにはならない。その証拠には、この本ものはどういう現れ方をしたかという、

「馬槽に臥している」

というわけで、人間らしい生まれ方はなさらなかった。これはどん底の生まれ方をされた。

## ● 全人

先程の「馬槽の中に」という讚美歌は傑作中の傑作です。これは由木康ゆきこうさんの作ですが、この一つの讚美歌を作っただけで、彼は生まれたかいがあつたと思う。あなた方も、そのようなことをしなければダメだよ。

「私は何もできないけれども、唯だ一つのことをした」

と。作曲でいえば、あの「荒城の月」みたいなものを。何も歌に限りませんが、

「これは彼より奪うべからず」

というものを遺して死んでくださいよ。約束したからね。この武蔵野の幕屋に来て、犬死になんかしたら承知しないから。みな、掛け替えのない使命を持って生きている。もう、



そういう張りがなかったら、男じゃない。では、女のひとはどうするかと（笑）。女のひとは、また別な使命があるから、まあ、だんだん言いましようね。

私は学校でも言うんですよ。D大学の生徒なんかは、大して頭は良くはないよな。けれども、「お前たちは、意気込みが大事なんだ。頭なんてものは大したものではない。東大

なんてものは大したことはない」

と。頭が今、ものを言っているから困る。では、何がものを言うんですか。全存在です。全人。全人でなければダメです。全人というものに本当になる。ゲートという人が、この

「全人」（デア・ガンツェ・メンシュ）

なんです。ということは、何でもできたということではない。ゲートにしろ、ダンテにしろ、とにかく一流の人物はみな全人的な生き方をした。ある自分の目的、あるいは、あるその瞬間に対しては、全的に打ち込む。打ち込みの気魄さえあれば、人生は大丈夫です。いいですか、どこでぶつたおれても。それを恐れたり、疑ったり、考えたりなんていうのでは、どうにもならん。

私も、

「大詩篇をつくる」

なんて宣伝ばかりしているけれども、できないかもしれない。一行も書けないかもしれない。けれども、ブラウニングは、

「百万を望んでも、一も得ない。それが本当の人間だ」

と言った。ブラウニングのこの言葉で私は非常に安心している。打ち込んで、地上ではゼ口であったところが、天上に行ったら百になったなんていうことになる。とにかく、皆さん、もつと線が太くならなくてはダメです。私みたいなやつだけでも、この福音に捕まえられたら、これはもうしようがない。そういうことになっちゃったんだから。

そういう打ち込みでもつて生きれば、それは必ず、「馬槽の中に」みたいな詩がいつか――詩に限らないよ――何かその人が本当にその瞬間に爆発したものが花咲き果が実る、そういう時がありますから。そういう生き方でやっていきます。絶対不敗です。いいですか。

「俺はダメだ」

なんて、けちくさいことを言ったらダメですよ。みんな、天下一品なんだから。私は、男性で意気地がないようなのが一番嫌いだ。だから、そういうようにひとつやっってください。

### ●女性即男性

こないだの「ハレルヤ」誌に私はキリストのことをこう書いた。

『私は何者でもない。何もできない』と言って、

神に投げ身して生きたイエスは女の女であった。

王者も、武威も、財力も、学者も



動かしかえなかったイエスは男の男であった。

御霊に貫かれ充滿してい給う天界のキリストに、

『主さまー』と叫び、一如となるう。」

と。これが今度の私の詩です。

「イエスが女の女」

なんて、まだ誰も如何なる詩人も言ったことがない。

「本当の女性道を歩いたひとだ」

ということですよ。これが打ち込みなんです。女性の方が、信仰の世界では素質がいい。非常にスツと、理屈を考えないで、スツといくわけだな。自分を本当にキリストの中に打ち込むような姿は女性の方があがる。女性は、信頼する男性にはうんと打ち込むからね。

それは、神さまにむかって本当にそれを打ち込んだのは、このイエスだから。イエスは女性中の女性だということ。だから、私は「女の女」なんて、こんな言い方をしてしまった。本当の女性道です。ところが今度は、本当の女性道を行くと、そこからの凄い力が上からくる。その力を得て動くのが男性道なんです。女性道が先なんです。

「俺は男だ」

なんて威張ったってダメだよ(笑)。

まず、キリストのように自分を打ち込んで、

「自分は何もできません。私は無力そのもの、無善そのもの、無教、無言そのもの  
です」

と。その無の世界が女性の道なんです。そうすると、今度はそこから、その次に無量となる。「無即無量」というのは、女性即男性ということなんだ。こんなことは、今日初めて言う。無即無量とは、無となると、全部託すると、無量なものがある。その無量な力が動きだすところに、この男性道が現れる。そして、何ごとをもやつつけていく。だから、本当の人間道というのは、この二つを渾然としてもつものを、本当の人間という。これが

「デア ガンツェ メンシュ」 「全人」

という。「全存在的」というのがそのことです。イエス・キリストというひとはそういうイエス・キリストなんです。だから、女性の心もよく分かるし、男性の心もよく分かる。どつちでもよく分かっちゃいます。私みたいな者がそういうところに来てしまったから、正直、不思議なんです。歌舞伎をやる役者なんていうのは、非常に女性道をうまくやるね。それはまあ半分冗談ですけども。

私のこの詩を読んで、

「『イエスは女の女だ』なんてひどいことを言うな」

なんて思ったかもしれないが、こういう詩の奥の世界が読めなければダメだ。詩というものは、観念で表現したらダメなんだ。本当の女性道を歩いたら、それは実は本当の男性道



と一つだということ。そういう意味において、男女は片一方だけであつたらダメなんです。必ずこの両面がくるんです、本当の世界は。両極をちゃんと持っている。

### ● 献げと担い

11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主すくいぬしうまれ給えり、これ主キリストなり。

12 なんじら布にて包まれ、馬槽うまぐらに臥しおる嬰兒みどりごを見ん、はその徴しるしなり』

馬槽の中にキリストは人間のどん底の現れ方をした。

「これ、その徴なり」

と。イエスというひとは、要するに、極限存在なんです。極限的存在です。大体、私も、いい加減な心ではおさまりがつかない。どん底ということ。キリスト以上にどん底に誰も立てない。自分がどん底だと思つたら、とんでもない。パウロは

「我は罪びとの首かしら」

なんて言つたけれども、罪びとの首になつたのはキリストなんだ。全部引き受けてしまった。我々のどんな悪も全部、キリストは引き受けてしまつて、「我は罪びとの首」というのは十字架なんです。十字架が、この罪びとの首となつて担つてしまつた。パウロはその次くらいだ。キリストの生まれ方はどん底の、担いの生れ方をなさつた。

女性道は、別な言葉でいうと、献げなんです。投げ身でも、献げでも、表現は何でもいいよ。キリストは自分を全部、神さまに献げてしまつた。そうすると今度は、担いになる。献げと担いが、これが一如です。本当に献げてしまつたと、今度はもの凄い担いの力が出てくる。ギリシア神話のアトラスというのは地球を持ち上げたというけれども、アトラス以上になる。そういう、献げと担い——女と男——です。このイエスの現れ方が、その担いのどん底です。

### ● 平安運動

13 忽たちまちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き

所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』

と。この訳を読むと、気がぬけてしまう。もうみんな言い古した言葉だからね。これは、

「いと高き所、至高の天には、栄光が神にあるぞ」

ということ。です。

「栄光、神にあれ」

ではない。「あれ」なんて、ギリシア語では何も書いてない。栄光が神に現れた。

「天界に神の栄光が現れた。だから、いよいよ栄光があつてください」

という祈りはその後です。今、現に、現実を語っているんです。これは現実を讚美している。それから、



## 「地には平和」

の「平和」は、これは間違いです。古い聖書を見ると、ちゃんと「平安」と書いてある。この方がいい。改訳したらいい。

## 「地には平安、人には恩沢あれ」

と書いてある。とにかく「平安」という字が当ててある。

## 「神―キリスト―我」

の縦の、関係がはつきりと立っていることを「平安」という。人と人との間の、横の、関係の安らかさは「平和」という。

「平和運動」なんかをいくらやったってダメなんです、まず平安運動をやらなければ。クリスチャンは、平安運動をやらなければダメです。平和運動なんて、絶対に参加してはいかん。我々はこの平安運動です。縦の関係から横にくるので、縦が先です。

だから、地には、この主が現れたので、

## 「本当の平安が、主の喜びたもう人に来たのだぞ」

ということですよ。あなた方はその聖書のところを直してくださいよ、「平安」と書かなければダメです。「シャーローム」という同じ字だけでも、ユダヤ人が「シャーローム」と言うときは、

## 「神の平安、なんじにあれ」(シャーローム ヤーヴェー レカー)

という意味なんですからね。

## 「シャーローム レカー」

## 「シャーローム ラーケム」

とか、単数や複数で言いますが、でも。「こんにちは」とか「きよなら」と言うときは、

## 「平安が、本当の安らかさがありますように」

と言う。これは世界最高の挨拶だね。日本語の

## 「きよなら」

なんていうのは、

## 「それではしかたがない」

なんて、「きよらば」というのは諦めの言葉なんだ。ドイツ語は、

## 「アウフビーダーゼン」(またお会いしましょう)

という。「グッドバイ」は「ゴット バイ」だから割合にいいけれどもね。

そういう響きが聞こえてきたというんですから、とにかく素晴らしいことです。我々も生活で、何か異次元的な絶対次元なものにぶつかったら、非常な確信がでてくる。

N先生のお兄さんが亡くなる一週間くらい前に、天界の幻をはつきり見て、自分がその中を歩いている幻を見て、すっかり平安に来てしまった。実は私がお訪ねして、端的に福音のお話をしたあとであつたらしい。今までの、いわゆる無教會的な信仰から突き抜けま



したから、N先生のお兄さんは本当に天界へ凱旋された。やはり、人間の魂は、本ものにぶつかるまでは、どうにもならないようにできているんです。

### ●御霊の実力

今日の題は「たんしよいかん誕処如何」という。

「生まれた処はいずこ何処なり、どんな具合か」

と。キリストは始めから、

「ひとの子は枕するところなし」

なんだ。始めから、その生まれ方からして、彼は柔らかい布団の上に寝られなかった。馬槽の藁の中に置かれた。

御使が現れて、マリアは始めは驚いてしまった。まだヨセフを知らないのに、そんな変なことがあるかと。マリアも普通の女だった。ところが、御使が言うには、聖霊が宿って、

「みづこの子は御霊による子である」

と。これは全然、別な現象が起きた。マリアは、これは考えたってわからない。疑ってもしょうがない。初めは、どうしたことかと思つて困つてしまった。けれども、

「みづこの御意の如く我に成れかし」

と。これは聖書の文句の、実は一番大事なものの一つです。キリストは、

「みづこの御意の如く成させたまえ」

と言つたが、マリアはもうその先にそれを祈つてしまった。

「みづこの御旨の如く我に成れかし」

と。マリアは自分を託したわけですね。

神の御旨というものは、人間の思いと違うんです。これは実力を持っている。霊的な実力を伴っている。霊的な実力を伴っているから、御旨は成るのです。

「あた人には能わねど、神には為し能う」

というのは、神さまの思うことはみな実現していく。御旨の中にちゃんと御霊の実力が入っていますから。キリストの降誕は――大体、天界にいたものが地界に現れるときに、どうしたってそういう霊的なひとつの特別な現象が起きなければ、現れようがないわけです――それは乙女マリアを通して現れた。

そこに、「通して」ということに、「肉となつた」という、普通の人間となつたということ、天界のものがこの中心であるという、その二重構造をなしている。キリストというひとは、中心は光っている。そういう意味において、霊肉渾然たるのがキリストです。肉の弱さを持っているから、キリストはいつも祈っている。

「どうぞ、あなたの御旨が、あなたの霊的な実力が、いつも私を覆ってください。突き抜けてください、浸透してください、満ちてください」



とやって、動いていたわけです。キリストの生まれ方は、そういう霊肉渾然たるものです。霊がもちろん、中心で支配している。御霊が支配している。御霊がこの主体となる。それは自明的なことではない。この御霊は、霊界の神さまいつも交通がなかったら、いくらキリストだって、手離しではダメなんです。

キリストはマリアの胎内にそのようにして宿りましたが、生まれた後でも、キリストはいつも神の胎内にあるようなひとなんです。ヨハネ伝1章に出てくる。

「神の御懐にあり給うところの独子」ひとりご

という。だから、いつも神の胎内に宿っているような在り方をキリストはしておられた。

### ● 藁の器

私たちがこの降誕節を迎えるゆえんのもの、なるほど二千年前にはもちろん馬槽の中でしたが、今度は私たち自身が即ち馬槽である。我々自身の中にキリストを迎える。パウロは「土の器」と言ったが、これは藁わらの器だ。

藁というのは非常に私たち日本人には親しいわけですが、米を食べているから。あの藁というものは何にでも使える。縄にもなるし、草鞋わらじにもなるし、藁布団にもなる。あのカスみたいなものが実は非常に大事なものです。藁わらぶきの屋根というものは、夏に涼しく冬に暖かという。文明の屋根は本当はかなわない。火が危ないものだから、今はやらないけれども、本当は藁わらの屋根が日本の風土には一番合っている。それが、人口過剰で文明が進んでしまったものだから、どうにもならないけれども。この藁の器の中に――我々はこの藁のように何も無い。空っぽだよ、あの藁わらというの。カサカサしている。ところが、藁は決して弱くはない――その中にイエス・キリストを、私たちという藁の器の中にキリストをお迎えする。

二千年後の我々がキリストの「誕処如何」ということは、生まれる処は如何というのは、

「人新たに生れずば、神の国に入ることができない」

と言うが、キリストを迎えることによつて、私たちはキリストと一緒に誕生しなければダメだ。キリストと一緒に今日、誕生する。

「まだ私は少し旧いふる我があつて、『誕生する』なんて言われても、先生、困ります」

なんて。困らないんだ。そんなことは心配いらん。この新しいものは、その旧きやつをどんどん本当のものに化していくから。本ものに化していく。本ものが入ってくると、本ものに化せられるんです。自分の側から

「潔くなろう」

とか、「何であろう」なんて一生懸命で考えるから、信仰がおかしなことになる。みんな同じことです。みんな、人間なんてものは、

「義人なし、一人だになし」



とパウロがはっきり言っているとおりになんです。そういう中に本当のものを入れれば、必ず質的に本ものに化していく。その自信が出てくる。どんなにこつちがマイナスであつても、大丈夫ですから。この信がなかったら、もう信仰はやめた方がいいですよ。

「私は自分の信仰をもつと強くしなければ」

とか、

「厚くしなければ」

とか、いろんなことを考えているうちはダメなんだ。こつち側はもはや問題でない。私はいつも言っているでしょ、

「ギリギリのところ自分に自分を置かなければ、本ものになりませんよ」

と。そうしたらば、このキリストという本ものが来たら、これが来たら、何かしらんけれども、さっきの喜びが湧いてくるでしょ、歡喜が。

「そうか、私はもう自分なんか問題にしなくてよかつたんだ。藁でたくさんだ」

と。藁の器でいい。日本人はやはり、福音を日本的に受けとらなければダメです。だから、今日私は非常にこの藁が楽しくなつてしまつたな。山でも草鞋が一番いい。

### ●無才

そういうようにして、我々はキリストを我々の中に、御霊のキリストを宿して、ここに生まれる。

「私は主と共に新たに今日、誕生しました。まだ、一才でもありません。ゼロ才、

一日才です」

と。我々は0(ゼロ)才の童子である。乳児である。キリストを常に新たに迎えているような在り方は、いつもこれがゼロ才である。だから、これは「無才」です。才能もない。無才というのは、今日初めて言つたね——こんな言葉を勝手に使つたらダメだよ。ここで話しているから、皆さんはわかるけれども、こんな言葉をいきなり出したって、

「何だ？ 無才なんて」

ということになる。如才ないことを言つてはいかん——本当に私たちは無才です。そうすると、これは無限才ですから、永遠の生命を持っている。

あなた方は、行き詰まったり、疲れたり、いろんなことがあるでしょう。その時に聖書を、福音書をパツと開いて——どこでもいいから、ちよつと一句、二句でいい、パウロの書簡だつてかまわない——それをグツと食らうんです。劇だから。読むこと、食らうことと祈ることが、これ一つです。そうすると、力がくる。これをやっぱり普段からやっていなくては。

「先生、どうもこの頃、私はダメです」

なんて言うが、ダメもヘツタクレもない。ダメな時こそいい。ダメな時ほどいい。ダメな時ほど、いよいよ無才になれる。そして、キリストがそのダメなところに入つてくださる。



どうぞ、一切の運命環境に勝ってくださいよ、支配してください。相手がどんなに偉そうに見えようが、強そうに見えようが、ひとつも恐くない。いいですか。

それだけキリストというものを受けとらなかつたら、「信仰」なんて言ったって、それは信仰ではないですよ。それが本当の女性道です。そこに本当に、さつき言った男性道が出てくる。強い力が。それは女の人であろうと、男の人であろうと、同じことなんです。

「男も女もなし」

とパウロが言ったのはそのことなんです。

### ●両極性

私は『曠野の愛』26号に書きましたが、あれは「言い逆らいの徴」ということを語った歴史的なものだったんです。シメオンという御霊の人が、

25 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔けいけんにしてイ

スラエルの慰められんことを待ち望む。

本当の慰めを望み待っていた。慰めとはいい言葉だ。あなた方は、悲しい時にキリストの中に本当に入る。そうしたら、キリストの慰めは必ず励ましに、勝利に変わっていく。諦めではない。

聖霊いまその上に在す。26 また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、

「ナポリを見るまでは死ぬべからず」

なんていう言葉があるが、ナポリは景色のいい所らしい。私は飛行機の上から見たけれども、これは、

「キリストに遇うまでは死ぬべからず」

ということ。キリストに会ったら、いつ死んでも大丈夫。死なないから。

私は仏教だつて好きですよ。東洋人、日本人には仏教的な悟りの世界は、これも非常に肌に合うんだよね、正直。また、ある意味において、悟りというものは非常に大事なものを持っています。現実如何にかかわらず、はつきりとそれを大きく呑み込んでしまう。その意味において、福音の中にも悟りということがあつたつて一向差し支えない。

けれども、悟りだけではないんです。終末的な未来、現在、過去。我々はそういつた時間的存在である。皆さんは過去を持っている。現在がある。そして、未来がある。あなた方の未来は、20代の未来なんていうのは大変なものだ。私はもう70に近いからね、まあ、地上の未来は。

これは時間の世界だね。それから今度は、空間。空間といえ、こないだおもしろいことを聞いたよ。宇宙には、別に「アンティ・ユニヴェルズ」(反宇宙)があるということ。スウェーデンの天文学者が言っているそうだ。こちらがプラスのユニヴェルズ(宇宙)だと、



マイナスのウニヴェルズがある。宇宙というのもやはりプラスとマイナスが考えられるらしい。何でもすべて、陰と陽とか、ゲートが言ういわゆる「ポラリテート」「両極性」というのがあるんだね、宇宙の構造に。たとえばもし、プラスのウニヴェルズにU君という男がいると、アンティ・ウニヴェルズにもやはりU君というのがあるんだそうだ(笑)。それでなければ、この宇宙は安定しない。そうすると、

「君もU君か」

と言って二人が握手すると、両方とも消えてしまう。プラス・マイナスで、握手したら消えてしまう。そういうようなひとつの天文学的な仮説ですが、私はそういうことを聞くと楽しくてしょうがない。

### ●人間は本来、無

だから、本来やはり無なんだ。あの禅宗の第六祖になった味噌すり小僧は偉いよ。

「人間は本来無である」

ということを言った。本当に自分を突き抜けてしまった。私みたいな——あなた方はあまり立派すぎるんだよね——躓いたり転んだりするやつは非常に無に入りやすい。もうこんなものは相手にしないという気持ちに私はすぐなる。自分なんてものは相手にしたってどうにもならないから。そして、キリストの中にグッと入る。本当は私は藁みたいなものだ。

イエス・キリスト自身が自分を何ものともしないということをはっきりとやった。これは罪無き世界です。自分を何ものともしないで、

「神さま、あなただけです」

とやっていったのがキリストという人なんだ。それが本当の義だというんだから。

「あれは道徳的に正しい真四角な人だ」

なんて、そんなのは本当の義ではない。本当の義というのはやはりまん丸なんだな。義と愛とが渾然としている。

宇宙も球体である。宇宙はとにかく、全体は球体で膨張しつつあるという。それからもう一つは、宇宙は円盤式なものであるというのと、もう一つは馬蹄形だというのと、その三つの説があるそうだ。円盤や馬蹄形だと、まっすぐ飛んでどこかへ行ってしまうってわからなくなる。ところが、球体だと、これは限りなく行くとまた元へ戻ってくるという。

球体というものは無限体です。これはいくら行っただって、はてしがたい。グルグル、グルグル回って。糸毬いとまきみたいなものだ。あの糸毬を見たら、そう思わなくてはダメです。糸毬の軌道は無限であると。あなた方は、何を見ても、そこに永遠的なものを見なかったらダメですよ。

「花は移ろう」

なんて言っても、移ろうところに本当は、移ろわざるものがちゃんと出ているんです。



もう何が来たって絶対に負けやしません、この世界に入ったら。しかも、このキリストは無限無量の内容をもつて一切の真理を全部包摂するところの、また限りなく創造していくところの――悟りではないです――そういう驚くべき霊的存在です。太陽がどんなにエネルギーがあつたって、キリストの霊的存在のエネルギーというものはもつと凄いエネルギーです。原子力爆弾なんていうエネルギーがあるけれども、我々の中に来るキリストのエネルギーというのはもつと凄いんだ。

本当にキリストのエネルギーは凄い。そこへ行ったら、癌なんか消えてしまふよ、正直。それくらいのもの凄い祈りの世界に、時には入ってごらんよ。私は本当に気の毒になるよね、私に躓いている人たちを。

そういうわけで、無限無量のキリストです。キリストが誕生すると、キリストをうちに宿すと、あなた方は質的にそうなる。これはもう、使徒たちはみなそうなんだ。使徒たちを、パウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブなんていう者を祭り上げる必要はひとつもない。あれはみな友だちだ。

「パウロさん、ペテロさん」

でいい。「パウロさん、ペテロさん」と本当に親しく言える人は、自分がキリストでぶつぶざれた人です。キリストでぶつぶざれてすつ飛んでいる。

「まだ、飛んでない」

なんて言う必要はひとつもない。飛んでいるんだ、みんなは。飛んでいるくせに、飛んでいない顔をしてはいかん。キリストは、飛ばしてくださいだ、ちゃんと。それが十字架という恵みなんです。

そうしたら、これがもの凄い回転を始める。だから、私は嵐が好きだ。嵐を恐がっていたらダメだ。嵐も悪いことをするけれども、ああいう悪いことをすることを私は何も言っているわけではない。これが無の真空の目玉、嵐の目玉。この中心に力が凝集している。言葉は、言葉の奥の世界が、沈黙の無限無量の言葉が、ただ発しているだけのなし。だから、本当の言葉は、私の発している言葉の奥にある。それがこの世界。行為でもそうです。いわゆる行為はまだ枝葉の行為であつて、本当の行為は、「在る」ということが、存在が行為なんです。存在そのものが行為なんです。存在的行為、これが一番ものを言う。その人が居ることだけでもって、何かしらんけれども、全体に力と光と暖かみが遍在遍照している。キリストという人はそういうひとです。分析の世界ではない。もうたまらんです。

### ●正気の沙汰

シメオンはこの御霊に感じたものだから、

27 此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例に遵したがって行わんとて来きたりたれば、28 シメオン、イエスを取り



いだき、神を讃めて言う、<sup>29</sup>『主よ、今こそ御言に循したがいて僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。<sup>30</sup>わが目は、はや主の救を見たり。<sup>31</sup>是もろもろの民の備え給いし者、<sup>32</sup>異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』<sup>33</sup>かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、<sup>34</sup>シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたんに為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。<sup>35</sup>——劍なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念おもいの顕あらわれん為なり』

私は今日一番先に、「世の中は狂っている」と言った。気違いだ、そんな爆弾なんか。警察官の奥さんが犠牲になった。

「こういうことは再びしてくれるな。自分の家内だけでもう止めてもらいたい」と、立派に言っていましたね、あの人は。武士道的な精神です。

もし、気が狂うならば、神のために気が狂えばいい。パウロがそう言った。

「神のためには、我は気が狂ってしまう」

と。変人だと。しかし、神のために気が狂っているのは本当の正気なんだ。もちろん、キリストに在つてです。キリストに在つて神のために気が狂っているのは、これは正気まことの沙汰なんだ。狂気の沙汰ではない。けれども、この人は何もいわゆる非常識なことをしようというのではない。パウロも非常に良識を持っている人です、パウロの言葉を見ると、

「およそ、何々を尊べ」

と言っている。決して、宗派根性なんていうものがない。本当の凡人が実は、神のために気が狂うほどに打ち込んでいるところの正気まことの沙汰の人が、その中に突き抜けてしまうと、これが平々凡々の如くある。あるいは、愚人、馬鹿者。人には騙だまかされ通しの人。あの良寛とか、ああいう坊さんたちはみんなこっちの方だ。

ということ、何と言いましようかね、ある時は本当に一切を蹴破つて行きますよ。しかしながら、ある時は一切を包んでしまう。それはちょうど一番いいのは、水だ。水は静かに器に入っているね、ちつとも力がないようだ。そして、まん丸い。ちゃんと器に応じている。器の方円に従つて、方円より溢れるという。四角にも丸くにも、どうにでも自在になつて、柔らかくて非常に柔軟だ。柔軟であつて、方円に従いながら、白水、泉になる。透明なる水は泉となる。泉のごとくに、色のつかない無色の水は、方円に従つて溢れていく。従いながら溢れていくような在り方が本当の在り方なんです。ぶち破つてはダメです。けれども、時には、滝となつてももの凄く下る。奔流する。奔流するかと思うと、今度は、水は太陽の光を受けて、スーッと蒸気になつて上がつていく。そして見えなくなつてしまう。そうかと思うと、雨となつて降つてくる。

自在でしょ、水の在り方を見ていると。実に自在に水は動いている。空気もそうですけれども。だから、私はこの四大というのは素晴らしいなと思う。四大を、地水火風を瞑想



している、もうその世界に入ってしまう。即ち、一切を容れてしまう。いわゆる純粹だとか何とか言っている世界ではないんです。

### ●終末的現在

だから、キリストが、

「父の全まきが如く全まかれ」

と言われた。完、全。直きも直からざる者も、正しきも正しからざる者も、潔きも潔からざる者も全部、これを吞んでしまう。これはキリストが来なければ、吞めませんよ、自分で吞もうとしたって。それは無理だよ、そんな力んだって。イエス・キリストがいらつしやると、キリストが私たちの中に誕生して、靈的生命というものが動きだすと、この完全性というものが天性となつてくる。

この天性というのはい言葉だな。これは本当に天性だ、地性ではない。キリストが生まれるところの天性が我々の中に生じてきますから。そうすると、これはくだらない切り方をしない。全部、これを吞んでしまうし、包んでしまう。担ってしまう。もうそこへ来なかつたらダメですよ。

そして、この狂った世の中に、本当のものは何であるかということ、身をもって自在な在り方で示していく。

「こういう在り方でなければならぬ」

なんでもものはない。水が千変万化し、空気が千態万様の姿を持つているように、そして、すべてのものを包んで、またそれを活かしているように、このキリストの靈の中に入ると、そういう人にだんだん化せられていく。「誕処如何」というが、我々の中にかくキリストが生れ給うとき、そういう人にだんだんされていくんです、あなた方が。これが本当の信の世界、本当の信即現の世界です。信は現である。そして、過去のどんなマイナスも全部プラスに化してしまう。それをプラスに化して体现してしまう。そして、未来を引き寄せる。これを終末的現在という。終末的現在とは永遠をもっている。

それから、さっきの「ウニヴェルズ」、「アンティ・ウニヴェルズ」も全部、これが自分の中に入ってくる。無的なんだから。無的実存という。

「なんと凄しい野郎だな」

と。もうこれ以上のことがあるですか。そして、最後のキリストの神の国の到来は、

「現に私の中に、皆さんの中に、その国は来ておりました」

ということになる。必ず来ます。イエス・キリストをどうしても受けとらないではいられないのは、それだけ驚くべき構造を持っているからです。単なる悟りではないから。

仏教も結構だよ。けれども、もつと素晴らしいのは、何と言ってもこのイエスの世界、キリストの世界です。十字架なんていうのは、本当は日本人には合わない。これは沙漠の



宗教だからね。だけれども、しょうがないよ、これは。それほど人間というやつはしょうがない野郎だから。しかし、その人間の矛盾を本当に渾然たる統合体にかしてしまおうのは、この「十字架と聖霊」の事態です。これだけが本当に溶かしてしまおう。私はしょうがないんだ、もう他に行きどころがない。あなた方は他に行きどころがあるのなら、行つたつていいよ。そうしたら、男の人も女の人も本当に柔らかくて、本当に強い。いいですか。どんなことにもぶつかつても絶対に負けない。相手を溶かしてしまおう。

### ●言い逆らいの徴

シメオンは、キリストを

「言い逆らいの徴を受ける人だ」

と言った。言い逆らいの徴だ。これはユダヤ人が律法の民で、

「自分が選民である。この律法を守らなければ」

とか、そういうようなことを言っているが、キリストはそんな世界をぶち破るから。旧約の世界をぶち破つて、本当に旧約がねらっているところのものを完成する。ただ直線的に完成するのではない。これを一遍、バーツと切つてしまおう。そしてこれを満たす。だから、どうしてもキリストは「言い逆らいの徴」だという。

それから、異邦人にとつても、これを受けとるのは、なかなか受けとりにくい。イエス・キリストというひとは、選民イスラエルにも異邦人にもなかなか躓きの器で、どうしても彼自身の存在は十字架なんです。こんな神の中に溶け込み、こんなに人をどん底から愛する人が言い逆らいの徴だなんて、およそ人間というものはしょうがない。失われたる存在、背きの存在、神に背いているところの存在ということが、イエスという人物が現れて初めて、人間の罪の罪たることがわかった。いかに神に逆らっているものかということがわかった。

私たちはもうこのイエスの中に飛び込むより他にない。飛び込みの口は開かれている。門は開かれている。この門は、いつも書いてある通り、門構えに十(十字架)です。ここを通つて入つて行く。あるがままに入れる。ただ平伏しです。そうすると、本当の砕けが——人間の平伏しや砕けなんていうものはまだ相対的なものです——ここに入ると、本当の平伏しが何であり、本当の砕けが何であるかが身についてくる。そうすると、そこに聖霊が働く。聖霊の働くところは本当の砕けと本当の平伏しをいただいているところです。聖霊は絶対に傲慢の霊とはちがう。傲慢の霊になったら、これはもうサタンの方ですから、聖霊ではない。同じ霊なのに。だから、

「十字架が抜けてしまったら危ないぞ」

と言う。人間はそれだけ危機的存在です。

私たちの中に、この藁藁の中に、キリストを迎え入れる。この素晴らしい生命力をいただき、力をいただく。そして、これはいただくばかりではなくて、



「常に神のものとして自在にこの器を、どうぞお使いください」と願う。

「私はあなたの御旨を本当に行いたい」

と。そうすると、そこに何とも言えない歓喜が生じてくる。この喜びは他のいかなる喜びともちがう。クリスマスがなぜ喜びの日であるかというのは、そういうわけです。

「艱難に遭えば、いよいよ喜べ」

と、パウロも言っているが、牢屋の中でも彼は喜んでいいる。なぜかと言うと、キリストのこの生命が来ているから、喜びという現象が起きざるをえない。そして、本当に人に喜びを与える。

これはイザヤ書の方々を引用すればきりがない。イザヤ書35章とか、あるいは61、62章あたりのところに出ていいるし、ヤコブ書1章、イザヤ書29章にもあるし、ゼパニヤ書3章17節にもおもしろい言葉がある。

「14シオンの女よ<sup>むすめ</sup>歡喜の声を挙げよ、イスラエルよ<sup>よろこび</sup>楽しみ呼われ、エルサレムの女よ心のかぎりの喜び<sup>よほ</sup>楽しめ。15エホバすでに汝のさばきを止め、汝の敵を逐いはらいたまえり。

これは旧約の相対的な現実のことを言っている。

イスラエルの王エホバ汝の中にいます。汝は重ねて災禍<sup>わざわい</sup>にあうことあらじ。

16その日にはエルサレムに向かいて言うあらん。懼るるなかれシオンよ、汝の手をしなえ垂<sup>た</sup>るるなかれと。17なんじの神エホバなんじの中にいます。彼は救を施す勇士<sup>ますらわ</sup>なり。彼なんじのために喜び<sup>ますらわ</sup>楽しみ愛の余りに黙し、汝のため

めに喜び<sup>ますらわ</sup>て呼わりたもう。」(ゼパニヤ3・14、17)

という、非常におもしろい言葉がある。

しかし、私たちはキリストと共に、ある意味において、この「言い逆らいの徴」になる。なかなか日本人は福音を受けとらない。けれども、今までのようないわゆるキリスト教的な在り方ではダメです。もつと柔軟心をもつて担い、そしてまた、現すべき時ははつきりと発言する。そこは自在でなくてはいかん。こういう時にははつきりとももの言言ってバーツとやるか、こういう時は黙って担うか、それぞれ神さまはパツパツと教えてくださる。そういう在り方で自分を提身していくわけです。要するにどの道、いわゆる工夫だの技巧ではダメですよ、工夫だの技巧を考えていたら。いつも、キリストに自分を投げだしているという態勢が大事です。それはどんな姿をしていても、本当の権威をもっているんです、天来の権威を。今は、そういう福音的な権威が非常に希薄になっている。

私たちの中に、その意味において、本当の平安が来、本当の歓喜が来る。これが我々のクリスマスです。終わります。

